感じたこと

中央隊　滝　三義

才二宮古島台風（通称コラ）が九月に宮古島を襲い多大な災害を与えた。災害復旧派遣隊員として約三十日間の復旧作業を通じて感じたことを自分なりに述べてみることにする。

まず我々が到着した時島民の我々に対する感情は二通りあつた様に感じた。一つは、本土より我々が来たことに対して本当に心から感謝してくれた人々、他は、我々の仕事の出来高を気にして、我々が来るよりも現金が欲しかつたという人々

実際作業に行つても人々が、我々の作業の姿をじつとみているだけであつた。我々は必死になつて仕事を行なつた結果、ようやく作業の方は認めてくれたが、まだまだ何か特別な目で見ている感じがした。その理由として、我々が気分を害して帰国したならば、本土政府の気分もこわすことになりこれ以後の援助にも差し支えが出るのではなかろうかという、一種の島国根性が働いたからだと思います。

このように人々の必死の気持を感じた時、いつたい我々は来てよかつたのだろうか？　と考えたこともあつた。

ところが、下崎部落へ行つた時、部落長が「皆様が来てくれたことを機に私達も産業開発に努力し一日も早く本土に復帰するよう努力します。」と語られた時、我々が帰る時までには、人々全部がこういう気持になつてくださるだろうと考え、来たことに対して初めて良かつたと感じた。

各集りにおいて必ず出る本土復帰に対して少々述べて見ると、上層階級と一般の人々との考え方は少々異なつていた。一般の人々はとにかく純粋な気持で本土復帰すること、祖国に帰ることを望んでいたが、上層階級の人々は、頭がいいのかどうかは、自分には理解出来ぬが、現在のままの状態で本土復帰をしたならば現在の生活以上のものを本土政府から援助してもらえるだろうか。この状態をも持続出来得るだろうか、という考えだ。

僕としては、いつまでも援助にたよつて生活していることが本土復帰を遅らせているように思えた。ただ

一つ面白い意見と思つたのは、米国の援助を受けている間に産業を開発しその上で本土復帰をしたいとの意見であつた。上層の人々がこのような考え方で動いたならば本土復帰も早いように思われた。

我々はあまりにも沖縄のことを知らなさすぎた。人々と話をしているとあまりにも本土のことをよく知つていたのにはとまどいをした。

そしてこれではいけないと思つたのは、宮古の人々が、若者達が島をすて、本島や本土へと渡つて行くことであつた。生れ故郷のために働きたくても働くことのできない現状を見る時一抹の淋しさが感じられてならない。

帰国の時、多くの人々が送つてくれた。帰るというよりは何か故郷を離れるような気がしてならなかつた。そしてこれを機にもう一度日本という国に目をむけるべきでなかろうか。

台風十八号コラ

中央隊　小林敬佑

陸上での観測史上最も大きな台風「十八号コラ」は四日夜半から六日の明け方にかけて宮古島で猛威をふるつて、陸上、海上共に大きな被害を与えて通過した。台風コラの来襲と共に、四日夜から島全区域にわたつて停電、五日朝には台風を追つて、活躍していたレーダーの故障、昼過ぎには一切の通信施設は使用不能となつて、宮古島は完全な孤立状態の中で二日間にわたつて台風にもまれ続けた。

マリアナ諸島沖で発生した熱帯性低気圧は、その日の朝には台風に成長し、「台風十八号コラ」と命名された。

コラは十六号の後を追うようにして北上していた。四日夜十時三十分風速二十米、翌五日の午前六時三十一分には瞬間最大風速八十五・三米を記録、同七時三十一分に北東の風六十・八米の最大風速と、これまでの陸上での台風観測史上の記録を次々と書替えてい

つた。

被害状況

重軽傷者　二二名
家屋全壊　四五五〇戸
家屋半壊　七一五〇戸
合計　一一七〇〇戸
船舶　五屯以上　沈没　三隻
小被　八隻
五屯未満　沈没　三隻
中被　一隻
小被　五隻
クリ舟　七隻
政府立学校
全壊　六校
半壊　六校
家畜農作物の被害
牛　一一頭　馬　一七頭
豚　八〇頭　山羊　一、二九〇頭
鶏　一五、〇〇〇羽
甘藷　二〇、〇〇〇キログラム
サトウキビ　約六五パーセント

と被害は大きく、被害総額約十万ドルとなつた。しかし、九月八日から日本政府、米国政府、琉球政府から次々と救援物資が到着した。その他にも、個人や慈善団体等からの救援物資も到着していた。我々産業開発青年隊一行も日本政府の救援隊として三二名が派遣され、活動に従事した。

以上

参考までにこれまでの宮古島台風観測で、最も規模の大きな台風は、

昭和二十五年六月二十三日午後三時三十五分「五号エルシー」による最大瞬間風速七十米の猛威をふるい死者二五名、傷者一三九名、行方不明一〇名、家屋全壊一三一五戸、半壊一一二一戸である。

今回の台風では家屋の全半壊は多かつたが、人命が失なわれていないのが、不幸中の幸いであつたと言わねばならないだろう。

「子供達と共に」

中央隊　樋口日出也

上野村の上野小学校、今遠く離れても、もう一度行つてみたい気がする。

その小学校へ行つたのは、たつた二週間であつたものの大きなものが残つている。

休憩時ともなれば、我等の作業している周辺に集り、何やら変な言葉で噂をしながら時間がくると、すーと校舎内にすい込まれるように入つて行く。そのような日が二、三日続き次の日には彼らも大胆になり、我等の作業している様子をみてなのか、練りスコを貸せなどと言うようになり、貸してやつたならば、見よう見まねで小さな手をたくみに動かし始めた。なかなかうまいものだと感心した。

親しくなるにつれて作業を手伝うようになつた。

ある時、二人の児童が一輪車で砂を運びに行つたのは良いのだが、二人で片方ずつ持つて運んできた。その調子で目的地まで車を運ぶかに見えたが、ゴール直前にきてひつくり返してしまつた。彼らの顔をのぞいたら、この豆運転手達宮古地方の方言で、いい合いをしている。全く何をしているのかわからないけど、何となくその調子が面白いので聞いていた。

又ある朝、一時間目の授業であるのにスピーカーで「六年生はバケツを持つて運動場に集合」とアナウンスしている。何が始まるのだろうと見ていると、先生を先頭にして、ぞくぞくと出てきた。そして二人一組となつて、砂、砂利、砕石を持つてきた。

あれよ、あれよとみるまに、骨材を山のように積んでいつた。彼らの仕事に対しては集団であるかもしれないが、面白くやつてのける。見ているとすばらしい光景である。また子供達と相撲をするのも面白い。宮古の相撲は手をついても負けたことにはならない。彼等はそのルールさえ守らない。激しい相撲である。足を持つたらころんでも放さないのだから全く手におえない。またビー玉なども目だまと称して行なつていた。遊びごとは本土と変らない。身なりも小さつぱりとした清潔な物を着ている子供が多かつた。

一般に彼らは初めての人には静かで自分等が顔を出した当時は何を聞いても笑つてごまかしていた。もつ

と社交性があつても良いのではないだろうか。しかし、そのような点が素朴な島民の生活の基盤かもしれない。

宮古島派遣生活

香川県隊　香川正毅

十月十六日七時半宮古島平良港に到着、沖縄青年隊の盛大な歓迎を受けて下船。沖縄青年隊は我々より二十日早く来て、電燈の復旧作業を予定の三倍の能率をあげたそうだ。私達はその話を聞くと「なにくそ」沖縄青年隊が三倍であれば、本土青年隊は六倍ぐらいの能率で仕事をやると心に誓つた。沖縄青年隊は我々が着くとすぐ、沖縄本島での再会を約束して帰つた。

十七日から作業だ。私達十名は上野小学校のブロック壁の補修作業だ。台風が来て約一ケ月道路上に横倒ししたまま放置してあつた。まずそのブロックを整理した。

最初の五日間は小学生が見ているだけで、私達が話しかけると逃げて行く。けれど、六日目になると女生徒からラブレターをもらつたり、男生徒とは相撲をしたり、歌をうたつたりして友達になつた。

上野での作業は十月二十五日、百五十メートル全部完成した。生徒とは友達になつたけれど、話しをしても方言を使うので全然わからない。私も方言を少しおぼえた。女はミドン、男はビキドン、美人はアパラギアンガー、美男子はアパラギアザー等おぼえた。

十一月一日から仮設住宅、才一日目に感じたことは、十三日間で二十戸完成の予定であるが、十五戸が限界であると思つた。だけど仕事が馴れるにしたがつて仕事の能率もよくなつて一日平均二戸完成した。私達が主に家を建てたのは農家で台風の被害が大きかつた家だ。

家族はイモを食べていても我々には、コーラーパンを出してくれるので、非常に気を使つた。住む家は、家畜小屋である。そんな生活を見るにつけ、私達は早く家を建てなくてはと思い、休憩時間もなく働いた。特に住宅建設の作業に入つてからは、ずつと雨だつたので、作業能率は悪かつた。

十一月十二日は午後から記念碑の建設作業を行なつた。この記念碑が後生に残ると思うと、仕事も楽しく、夜八時頃まで仕事をした。その時の星空は非常に美しかつた。宮古島に来て一ケ月、生活にも馴れ、顔も島

の人よりも黒くなり、完全に宮古の人になつた。島を出航する時は、ずつともつと宮古に住みたかつた。

宮古島派遣を省りみて

幹部二年　宮　永　哲　郎

沖縄、まして目的地の宮古島は私達には見当のつかない、遙かな南海の島々にしかすぎなかつたのです。しかし、瞬間最大風速八十五・三米の台風十八号が襲つた大災害はいちはやくマスコミで知り、同じ同胞として復旧をただ祈ることしか出来ない我等の境遇でした。悲惨なツメ跡を追つて日数がたつにつれて、日本政府も行動を開始し、その白羽の矢が青年隊にむけられたのです。

創設以来海外雄飛の舞台は初めての試みでもあり、画期的一大事変でもあつたのです。必至です。是が非でもこの機会をと、所長をはじめ各関係者は飛び回り、交渉もかなり難航を示し、政府への談判、折衝、遂に念願かなつて派遣が決定したのです。

各主催の壮行会、この時から僕達の行動は別世界としての団体行動が始まり、緊張の連続が繰り返されます。日本政府としても海外へ奉仕部隊として送るのは初めてであり、関係者の寄せる期待は関心とともに大なるものであろう。こうした不安が負担となつても実感がまだ湧いてこない。

待望の出発。今日から約四十二日間の日定が日本復帰を願つた同胞の宮古島での生活日課となるのだ。渡航船旅での箱の中の日課は心までをもいらだたせる。一日も早く同胞の危機を救うがためにもてる技術を生かしたい。

沖縄に着く。その風景は私のイメージとは裏はらに澄みきつた青空の下に敷きつめられた色彩の強い市街地は活気に満ちあふれ今次大戦の悲惨な戦火の跡など、うかがえない現況です。

又船にゆられて朝が来る。甲板に出ると真前に小島が見える。隣りの人が　〃あれが宮古島だよ〃　と口ずさんでくれる。隊員間の表情は明るい。宮古の岸壁に入航、今現に宮古の大地をじかに踏んでいるのだ。私達の使命はこの島が戦場なのだ。持てる全精魂こめて発揮し、島民と一緒に働けるのだ。宿舎は市街地の中心であつた為、そこには台風の跡などどこにも残されていない錯覚を起し不思議な位でした。

しかし、それも作業に従事し、日がたつにつれて、部落を通ると方々に、又人里離れた道端の住家は見るに見かねる。無惨に到壊され、どん底にまで崩ずれた民は台風が去つて四十日たつた今日でも自力では再建不能の生計で途方にくれ、今日を生き、望みは援助の手のみといつた光景を見た時、言葉にもならず、荒れ狂い襲つた台風の打撃のきずなはここにまざまざと感じさせられました。それにひきかえ、この暑さと島民の開放感に満ちのんびりした行動はなんということだろう。以外に表情も明るい。宮古島のいたでは、島唯一の産業〝きび畑〟も堅固なローラーで敷ならした如く、たおれ、この生計の営みも望みは薄い。だが、宮古の人間も植物も生命力があり、立直つて生きようとする。作業それは日中の暑さとの戦いでもあり、初期の目的を達成するため、夢中で技術よりも忍耐との勝負の前半であつた。山林での仕事でもあり、部落民と接し交流する機会がなかつたのである。

時間的余裕のない日課が続く。しかし何一つ不自由のない環境身辺と、万全の受入れ態勢で支障なく、ひたすらに作業に没頭することが出来ました。

各方面の作業がこの南国情緒豊かな風俗気候に慣れるにはそう日数はかからなかつた。順調に軌道に乗つてすこぶる復旧工事もはかどる。休憩など余裕時間を利用して幼児から老人まで、島民とのひがの交流が始まつた。作業現場の行き帰りの通勤の人と銭湯通いに顔見知りになる。子供など特にものめずらしげに寄つてたかつてくる程までに可愛がり、精神面のつながりが回復とともにこうして始まつた。日中の作業日課が終ると、現場の幹部連中と又宿舎に帰つてから、夜島民の各グループが慰問品や交換会などの催しで労をねぎらつてくれる会合があいつぐ。今さらながら、宮古島民の我々に寄せる期待の大きさ（勿論精神面も多分に加味されています。）と、若い同胞の救助が来たことで感謝し、ひたすらに日本復帰を願いうつたえている姿がこれらの会合で痛感でき、任務を再認識した次第です。

繰返しの日課とともに早や前半の作業工程も終り、成果も予想以上の内容となり、各関係者を喜ばすと同時に隊員一同任務を果した満足感にひたることができた。一時的満足感も後半の十一月の初日に入り不安と変つてしまつた。と言うのも二十棟の仮設住宅建設を十三日間で完成するとの命令の目標が定められ、一日

目に一棟すら完成できなかつたからである。素人ばかりの隊員に加えて十日間降り続いた悪条件の仕事では無理もない。でもこの戦場ではそんな甘んじた考えは通用する筈がない。再建不能な住民は青空天上の家でやつと今日を生き、あえいでいる。ツメ跡をのこして四十日間が経過した時限がそんな状態では、一日も早く築かなければならない。その間島民とも接し、友好を深めることにも努め又夜は励ましの会食催しが依然続けられ、後半に入つてから余計日課があわただしく過ぎて行く。その頃になると、住宅建設も要領を得て着々と築かれて行く。だが依然として雨は降る。必死なのか、夢中なのか、ただ全力を尽して従事した。

これら従事した住家は余りにも悲惨な生活の家庭が対象となつただけあつて、見るに見かねる無惨さであつた。しかしそんな住民も僕等には好感を抱き最高のもてなしをするのであつた。建築途上に於いてすでに完成した住家に家族ぐるみ引越ししていると聞き実際にその姿を見た時、この時こそ〝勇気と愛をこの島に与えにきた〟のだなーと言葉になつて表現できたのです。

そして遂に二十棟の仮設住宅が完成し、初期の目的を三日も早く達成することができました。一日とて貴重な滞在なのです。そしてこの感激は実際に従がつた者のみ苦闘を経験した者のみが味わえる喜びなのです。さすがにその歓喜を味わつた後、どつと疲れが押しよせる。没頭し任務を終え責任感がとかれたこの心境、精魂つきはてて疲労とともに実に気持がいい。しかしつきることなく次の任務が待つていた。後三日という緊迫したにもかかわらず、疲れはどうすることもできなかつた。

作業の全日程が終る頃僕等派遣隊員の願いでもありその業績をたたえ記念碑が築かれ永久的にこの島の礎となるだろう。あわただしく過ぎていつた毎日であつた。

二十五度以上の炎天下の作業は汗と暑さへの戦いであり、住宅建設は精神と技術の戦いであつた。そして復旧工事がなんの支障もなく大成功の成果を納めることができたのも島民の各方面にいたるまでの協力、配慮があつたからこそ、この援助に対し隊員はつねに感謝していた。

そんな日程でも別れがくる。近所の母親連中、子供が別れをおしみ訪ずれに来てくれる。交換会も送行会となつて終幕まで続く。

出航の日が来た。埠頭には別離を告げに小、中、高の学校から、各市町村職員、島民全土をあげての見送りで予期せぬ盛大さに、又業績を残した数的な表現もこの時計れる。勿論満足感で一杯である。ここに集つた島民と各隊員はそれぞれ交流し、きずなを深め、一駒を設けることのでた人々なのである。

船が岩壁を離れるに従つて乱れ飛ぶテープが一本又一本と切れ、最後のテープが切れて、完全に宮古を離れた。いやそんな言葉は適当でないかもしれない。これから始まるのだ。この世に僕達が生存する限り永遠に礎とともに宮古島民との交流と友好がこれから開始の運びとなるのだ。肌と肌との島民との触れあいは遠く離れた島でもそのきずなは燃えつきないだろう。

誠に貴重な体験を得たものだ。小さな平和の使者として〝勇気と愛〟を与えて南国の島に一ページを飾れることが出来、光栄の限りです。そして海外渡航の魅力が僕を動揺させるに十二分でした。

最後に宮古の発展と島民の念願の夢である本土復帰を一日も早く実現することを祈りながらペンを置きます。

〝宮古教育のあらまし〟

宮古連合区教育委員長
上野区教育委員長　垣花義次

一、はじめに

博愛記念碑、久松五勇士ならびに去る九月五日の才二宮古島台風で有名になつた宮古島は、琉球列島の南西方、沖縄本島を隔つこと凡そ三二〇粁のところに位置している。

面積約一六〇平方粁の宮古本島の外に、大神、池間、伊良部、下地、来間、多良間、水納の七つの島と合計八島嶼からなり、人口は約七万である。

冬を知らない常夏のこの島の海の青と空の青の美しさは本土からの流行者の目をひくのであるが、台風の十字路といわれるだけあつて、毎年来襲する台風にはなやまされながらも生活力旺盛な宮古住民は台風と戦いつつ営々と農業にその他家業にいそしんでいる。

宮古群島は一市二町三村に分れてそれぞれの地域の行政に当つており、なお群島内の政府行政の総括的な面を指導、連絡のために琉球政府宮古地方庁が置かれ